

トライアスロンへのステップ

岩本 俊悦

一〇〇キロマラソンの発端は

「県がリゾート構想の認定を受けた時、我々民間団体で、この田沢・阿仁・八幡平地区をどのように全国に知らしめるか、そのためには何が出来るか、何をすべきかを考えていこうと、大規模リゾート連絡協議会」が発足した。この地域の豊かな自然と人情を前面に出したイベントを考えた末、秋田内陸線にS.L.を走らせようという構想が出され、関係者と交渉した。しかし、内陸線の線路はS.L.の重量に耐えられないことや、路線基盤を強化するには莫大な経費がかかることから断念せざるえなかった。その次に考え出されたのが田沢湖と鷹巣阿仁部をコースとしたトライアスロン。しかし、トライアスロンは鉄人レースと言われるほど苛酷なもので、特に水泳では水死する人も出ることもあるためドクターの協力が必要だったことや交通規制などの問題で暗礁に乗り上げた状態となった。せつかくここまでこぎつけ、やめてしまうのは……とトライアスロンへのワンステップとして開催したのが始まりだった」

実現までの苦労は

「第一回目は実行委員の総務として携わったが、一番難しかったのはさまざまな許可がおりるかおりないかだった。この時私は直接タッチした訳ではないが、大規模リゾート連絡協議会会長岩川徹君、合川町の畠山光正君は道路使用の許可を得るために、我々には言葉絶する苦労があったと思う。また、地域の交流が少ない人たちと一緒に仕事を進めていかなければならなかった。お互いの理解を得るのが大変だった」

年々人気を集めている理由は

「私が知っている限りでは、一〇〇キロマラソンは、北海道のサロマ湖、九州の阿蘇、そして本州では私達の所と三競技しかない。しかも、片道コースはここだけ。秋田が持っている豊かな自然を満喫し変化に富んだコースにチャレンジできること。そして心からの応援を受け地域の人たちの人情が伝わったからではないか。第一回目は五〇キロを含め六八人の参加者だったが、第二回目の時、全国紙にも取り上げられ爆発的に知られるようになり二一四人が出場、今回はすでに昨年倍の四五〇人余りがエントリーしている」

大会では感動的な場面も多いと思うが

「やはり走っている時の姿。夫婦で一緒に声をかけながら走る姿、選手同士が互いに励まし合う姿、そして沿道の応援を受けながらそれに応えて走る姿、マラソンを通じて隔てを越えた心のふれあいに感動する。心も体も疲れ切つてエイドステーションに飛び込み、まだ走ろうか、それともここでやめようか、と悩んでいたが、ボランティアの激励を受け、もう一度走る気になったという選手もいる。体力・気力の限界を越えゴールする姿をみると感動し、ほんとにやってよかったと思う」

ボランティアも大勢参加しているが

「ボランティアの人たちの協力がなければ選手たちも安全に走れないし運営も成り立たない。朝早くから沿道に散つての保安と応援は本当に感謝している。また、各町村の実行委員たちも忙しい中大会運営に携わってもらい頭が下がる思いだ」

今大会も含めどのような大会にしたいか

「飾りのない、ありのままを感じ、そして、また参加したいと思われるような大会にしたい。その中で、我々の地域の良さを知ってもらい、この秋田を全国に広く知らしめるイベントにした